

伊達政宗の筆跡に関する心理学的考察

黒田正典

一 問題と立場

伊達政宗の通念は「武將」である。しかし一九七六年、初めて一連の筆跡を見る機会を得た私は驚きを覚えた。武將らしい威厳ある筆致に加え、流麗で文人的な趣きをたたえていた。以下、私はこの驚きを背景に筆跡特徴、その心理的意義、背後の史的事実、三者の関係について心理学的考察を試みることにしたのである。

なおここで、この心理学的考察が進められる立場にふれたい。筆跡と人の関係の研究は筆跡学(≡Graphologie)とよばれ、その本格的な発足はゲートと同時代の人、ラーヴァテル(Lavater, Johann Caspar, 1741~1801)にさかのぼる。中国および日本における墨色判断や書論は科学となるまでに発展しなかった。ラーヴァテルの筆跡学は面相学(相貌学、≡ Physiognomik)の一部で、人や動物の面相の印象にはその内面の心理的特徴に対する認識が含まれていると考え、この認識を経験によって発掘してゆこうとするもので、面相学的立場の筆跡学ともいわれる。この型の筆跡学の完成者は生の哲学者、クラীগス(Klages, L.)である。これに対してロンドンのソーデック(Saudock, R.)は実験的筆跡学を開拓した。

かれらはいわば専門的筆跡学者であるが、やがて実験心理学者が筆跡研究に参加するようになった。最初は筆跡学の信頼性の実験的検討が行われたが、これがかなり高いことが判明して、心理学者たちは筆跡と人の関係を積極的に研究するようになった。ここに筆跡心理学(≡Psychology of handwriting)が成立する。今日では筆跡学も筆跡心理学もほぼ同義の語になっている。そして現代における筆跡研究の方法は、上述の筆跡学史を反映して、面相学的筆跡学に由来する筆跡の直接観

察と、これと対照的な実験的方法や統計学的方法とを併用している。

今回の政宗の筆跡分析は前者の方法をとることにする。もちろん統計的研究も可能であるが、実はこの統計の項目の確定には筆跡の直接観察が先行せねばならない。したがって今回の筆跡分析は統計的研究の予備研究ともいいうるが、もちろんこれだけでも完結した研究であると私は考える。

二 資料

見ることができ、かつ写真を入手することができた筆跡資料は、仙台市立博物館所蔵七点、大久保良雄氏所蔵の二点（以下※印の分）である。以下の文書の名称は私のやり方にしたがっておく点、了承ねがいたい。

A 政宗花押つき書状、氏家弾正吉継宛。

本文一三行、追伸五行。（天正一六年、一五八八、一二歳）

B 政宗花押つき書状、宛名不明。

本文一一行。（天正一八年、一五九〇、二四歳）

C 政宗消息、生母保春院宛。

本文二六行、全行間に追伸三二行。（文録二年、一五九三、二七歳）

D 政宗消息、夫人陽徳院宛。

本文二〇行、追伸四行。（文録二年、一五九三年、二七歳）

E 政宗筆軍法並掟書案。

計一七カ条。長いので、分析の対象としては「萬々仕置之事」七カ条をとりあげた。（年代不詳）

F ※政宗花押つき書状、金長州宛。

本文六行、追伸三行。(年代不詳)

G ※政宗献立メモ。

散らし書九品目。(年代不詳)

H 政宗和歌。

「そのままに まなひいたせる たまつはき くにもゆたかに ちよやへるらん」。(年代不詳)

I 騎馬武者像画讃政宗和歌。「出るより入山端はいつくそと月にとはまし武蔵ノノ原」。(寛永八年、一六三一、六五歳)
資料は以上のとおりであるが、筆跡の模様については、附図を参照されたい。

三 筆跡特徴の分析

1 政宗筆跡の二類型と全体的特徴

まず政宗の筆跡全体を通して見ると、文字の形には大きく二つの型が認められる。一つは習字手本どおりの端正な形、他は自己の癖、個性を出した形である。図1は筆跡Bから取りだした字で、「書、本懐、談、当、皆、会、之条先々」である。手本となるほどのよい形をしている。政宗の書の能力は、職業的書家すなわち祐筆や写経生をやってゆけるくらいだと思われる。

しかし他方では彼は彼なりに、図2に見るような個性的な字を多く書いている。これについては後に詳論するが、ともかくこのことによって政宗の筆跡は没個性的な祐筆の書にはならず、全体としては君主らしい個性のある書となっているといえる。

しかしながらこの二種類の字の両方に共通点がある。それはどんな場合でも用筆法が正しく、欠陥がほとんどないことである。

2 多賀城碑と対照的な全体特徴

種々の点で政宗筆跡の特徴を浮き立たせてくれるものが、私が調べたこともある多賀城碑である。この碑の文字は、気品は最高、字の形には古典的名作に典拠をもつものが多いにもかかわらず、用筆法の細部に不備が認められる。その一は横画終筆の止め方、筆の収め方があいまいで、方針は一貫しないことである。図3ではトンと尻もちをついており、図4では線を引っぱったままである。(短い矢印の辺を参照) そのほかいろいろの形が多い。もちろん芸術技巧として千変万化を打出すということも一般的にはありうることであるが、多賀城碑の場合、永字八法等の基本的修練の不足が、他の用筆法の不備をも勘案のうえ、推定される。その二は懸針といわれる字画、すなわち縦画の末端を止めることなく筆を抜き、先端が尖る形のものにおける欠陥である。図5節の字の最終の線は、まっ直ぐに引けず、ブルブルと震えている。これは最も極端な例であるが、図6では字画の幅が下に進むにつれて細くなる一方である。たいていの懸針の形にはこうした欠点がなんらか見いだされる。その三は、図4、図5の長い矢印で示されているような折画(曲がり角)における字画の幅の狭小化である。いわゆる「くびれた」形であるが、これも多賀城碑の文字全般に一貫する特徴である。

なおこれらの特徴は、石碑が古いための碑面の磨滅・欠損から生じたものではないことは、別途確かめられている。そして上述の各種の特徴は、この碑がフリーハンドで書かれていることを示唆し、中村不折画伯が唱えるように双鉤(籠字、文字の輪廓線)による名作文字の透き写しでは決していないことになる。古典名作に典拠が多いのは、臨書や背臨(記憶心像による模倣書き)によるものと推定される。

すなわち、多賀城碑は、用筆法の不備からは職業的書家ではない人物、そして典拠の豊富な文字からは教養・身分の高い人の書であることを思わせる。

そこで政宗の筆跡の問題にもどると、こちらは多賀城碑とは全く対照的に書家的な筆跡といつてよい。すなわち用筆法の不備がほとんど無く、そしてどの字も字画の肌が滑らかである。書風は徳川時代の公文書に使われるお家流で一貫しており、

大陸の古典を豊富に取り入れている多賀城碑と対照的である。

3 個性的特徴の分析

- (1) 個性的特徴の4類型 個性的な筆跡特徴は、資料Bから採取された図2（入魂、不及、是非、奥州、天下）における1、2、3、4の形態に代表される。

1の形は、「上伸び」と名づけることにするが、上の方向の非常に遠い位置—たとえば欄外に想定される一点—に向けて走る運動の現われである。短い単なる勾（はね）や、近傍に位置する点画に連絡する線は除外する。さてこの形を書く人の心理が問題であるが、西洋筆跡学をできるかぎり参考とし、なお不足の点は独自に補うこととする。他の筆跡学者にもほぼ共通であるが、ゾンネマン(Sommenann, U.)は、「書字面が類似空間的経験」をなす、という「全体象徴的観点」をとる。それによると、「上」はたとえば精神、観念、個人完成の世界を意味する。これからすれば、「上伸び」はさしづめ「自己向上の努力」ということにもなる。しかしここで、西洋の文字と共通でない縦書きという条件にも考慮をばらう必要がある。縦書きにおける上伸びということは、筆の進行方向と逆のほうに向かう傾向ということである。これは横書きでいえば「左への傾き」（そっくり反り）および「左走り」（線が左側へ大回りする傾向）に当たろう。これらの心理的意義をゾンネマンの説に求めれば、前者については「尊大」、後者については「独立」、「自己中心」等が見いだされる。これらをまとめて、「相手に対する抵抗」とすることもできよう。

2の形は、「下伸び」ともいふべきものであって、遠い下方にむかって速いスピードで走る。「下」は、ゾンネマンによれば、「大地」、「本能」等を意味する。また「下伸び」は縦書きでは筆の進行方向への猛進であるから、横書きでは「右に向かい傾き」と「右走り」となる。その心理的意義は、ゾンネマンの記述の中から、前者については「愛する能力」、後者については「感情移入」、「善意」等を見いだす。また「速さ」から「寛ぎ」を見いだす。これら全体をどうまとめ

たらよいだろうか。私としては「愛情」と「寛ぎ」とにまとめることにしたい。

3の形は、左下の遠い方向にむけて走る線で、「左払い」と名づけておく。これは筆を自分の体のほうに引きつける運動で、西洋筆跡学では一般に「求心運動」とよばれ、心理的意義としては「自己保持」が帰せられる。

4の形は、「右払い」と名づけるが、筆が自分の体から遠ざかる「遠心運動」である。遠心運動の心理的意義としては、西洋筆跡学は一般に「活動衝動」を帰する。

以上、文字の形とその心理的意義の関係を一通り考えてみたが、なおここで3の型と4の型については、別の仮説も立てられる。すなわち左払いと右払いが同一文書に共存する場合、それは「威厳誇示」の意義をもつと私は考えるのである。「肩で風を切る」、「見栄を切る」、「胸を張る」といった動作は、まさに「左に払って右に払う」動作である。「カイゼルひげ」を蓄えてひねる心理も同様であろう。威厳誇示特徴は今回の新提案である。

(2) 各文書における個性的特徴の検討 上述の筆跡特徴の4類型は各文書にいか分布しているであろうか。以下にその特徴が出てくる文字およびその文字の所在行(小さな数字)を示すことにする。原則として、問題特徴は掲げた文字の末端部に出ている。その他の場合は()内に注記する。また、二字あるいは三字がつながり一字のような形になっているものは、その二字または三字をまとめて示すことにする。

上伸び(心理) 自己向上の努力、相手に対する抵抗

A 元₃ 歟₄ 光₅ 入₇ 魂₇ 元₈ 元₁₁ 合(第一筆)₁₃

B 入₅ 魂₅ 非(ノ)レミの集合₅ 以₈

C 候₄ て₇ て₇ て₁₃ て₁₃ かしこ₂₆ (追伸)ん₃ かしこ₃₁

D ん₁₀ て₁₅ ニ₁₇ ん₁₉

E 老₅ 繩₇ 為(第二筆)₁₀ 已₁₀ 也₁₆ て₁₇ 罪₁₉

F 九朝 (最終画)₁ 礼₂ 兑₄

G て (三カ所)

H 「なし」

I 入₂

下伸び (心理 : 愛情、寛ぎ)

A 「なし」

B 州₁ 郡₈ 月 (日付)

C し₆ し₉ し₁₇ し₂₂ し₂₅ 「追伸」し₁ し₈ し₉ し₁₁ 申₁₃ し₁₅ 候₁₇ べく₁₇

D じ₁₁ へく候 (つしに見える)₁₂ し₁₄ へく候₁₈ かしこ₂₀ 「追伸」かしこ₄

E 事₁ 事₇ 事₂₁ 別₁₁ 刻₁₁ 科₂₁ 件₁₁

F 明 (月の第一筆)₁ 候₂ 外 (トの第一筆)₃ 「追伸」し₃ かしこ₃

G 「し、け等五字」

H 「なし」

I 「なし」

左払い (心理 : 自己保持)

A 入₁₁ 刷 (最終画)₁₂ 断 (最終画)₁₃

B 茶 (八の第一筆)₃ 及₅

C 京₂₁ 大₂₁ 夫₂₁

D ノ (くりかえしの印)₂₀

右払い〔心理〕：活動意欲、左払いと共存すれば威厳誇示〕

- A 企₁儀₁儀₆入₁₂
- B 本₃天₄
- C 〔なし〕
- D 〔なし〕
- E 〔なし〕
- F 人₂
- G 〔なし〕
- H ひ₂
- I 八₂

(3) 各文書における筆跡、心理、および史的背景 以上の各種文字特徴の各文書における分布状況を基礎にして、各文書ごとに、筆跡から推定される心理状態の特徴を述べ、さらにその背景の歴史的状况をも参照してみたい。さきに(1)において述べられたことが筆跡と心理の関係についての仮説であるのに対して、ここに述べられることは、その仮説に対する検証の過程である。

Aは、上伸びが非常に多く、抵抗・向上を示すが、逆に下伸びは全然なく、緊張・慎重を思わせる。この花押つき書状は、部下の大名である氏家吉継に対する指示を内容とするが、政宗はこの時二三歳。一種の公文書といえるこの書状を政宗は充分に意を用いて書いていることがわかる。それにしてもこの若さでこんなりっぱな字を書くとは、驚きにたえない。

Bは、Aに似ているが、下伸びが多く現れていることが注目される。書状の全体的特徴として、文字と文字の間は縦についても横についてもずっと広く、ゆとりがある。この書状はAの二年後に書かれたものである。以前よりも自信を増し、寛いでいる政宗の立場・状況がそこにあると考えられる。事実、政宗は重大な危機を突破し、その帰り道、成功の模様をいち早く知らせるこの書状を書いているのである。

すなわち、豊臣秀吉が小田原城の北条氏攻略にかかり天下統一も近くなった頃、政宗は周囲の諸大名への対策や攻略にせわしく、小田原参陣が最も遅れ、これが秀吉を怒らせた。秀吉のもとに集まった友人諸大名は政宗に速かな参陣を促した。政宗はさまざまの外部・内部の難問題をようやくきり抜けて参陣にこぎつけた。すでに友人たちの取りなしで秀吉の怒りは解けていた。秀吉は機嫌よく迎えて政宗を好遇、奥州の取締まりを命じて政宗を心服させる。書状はこういう時に書かれたもので、成功感から来る寛ぎがこの書状に反映していると考えられる。

Cは、上伸びが多いものの、他方、下伸びも多く、比率をとると八対一二で、下伸びが優勢である(二七八ページ参照)。そのため書状全体は縦長の字が多い印象を与える。下伸びは愛情、寛ぎの徴候である。また「自己保持」の左払いはあるが、「活動意欲」の右払いはない。つまり、この消息の全体は、筆跡特徴の観点からすれば、身を守るような気持ちもないわけではないが、同時に心を許している。

歴史的事実としては、この手紙は朝鮮出征中、生母に送られたものである。この生母との間には複雑な事情があった。政宗が小田原参陣する前のことであるが、小田原参陣を遅らせていた政宗は秀吉の怒りにふれていた。このままでは伊達家は滅亡と心配した母は、家のため政宗を毒殺し、彼の弟の小次郎を後嗣ぎにしようとした。

しかし事は露頭した。母を処罰することはできぬ。はじめは必要である。政宗は涙をのんで弟を殺し、小田原に馳せ参じる。内憂外患、まさに危機一髪であった。しかし、こんなことはあったが、政宗はその後、朝鮮からこの母にあてて親しい手紙、Cを送っているのである。話をもどるが、前出の政宗書状Bは、これらの難局をきり抜けて後の手紙なのだから、筆をとる手も軽やかに走るのも無理ないことである。

DもCと同様、上伸びより下伸びが多い。試みに両者の出現の比率を調べると、Cは八対一二、Dは四対六、すなわち両方とも等しく三分の二である。自己保持徴候の左払いは、Cが三カ所、Dが一カ所であるが、両者に字数、行数の違いがあるので、単純に比較できない。全行数との比較をとってみる。Cの本文は二六行、Dは二〇行で、 $3/26 \parallel 12\%$ と $1/20 \parallel 5\%$ となり、Dのほうが少ない。

このDは夫人の陽徳院にあてた消息であるが、生母あてのと同様、寛いで書いている。しかし夫人あてのほうが、いっそう寛いでいるかもしれない。Cは三月に生母にあてて政宗参陣が認められた喜びを報告しているのに対して、Dも朝鮮出陣中の手紙で、七月には日本に帰れる喜びを事前の三月に述べているものである。また「御めでたふ」の語は両方に見えるが、生母あてでは二回反復、夫人あてでは三回反復している。この差違の追求も興味あるが、いずれにせよ、政宗の率直さの一面が出てくる。

Eは上伸びと下伸びが同数出現し（七対七）左払いと右払いとは共にない。この文書は家臣に対して示す勤務上の心得の原稿で簡条書きである。してみると、上伸びは家臣の現状に対してはある抵抗をもつこと、下伸びは家臣への愛情をもつことを表わしているといえる。親しい家臣に対するものであるから、格別の威厳誇示をすることもないことも、理解できる。

Fを見ると、下伸びはわずかながら上伸びより多い（四対五）。左払いなく、右払いは一カ所だけである。AやBと同様、花押しき書状であるので、三者を比較すると興味ふかい。AとBでは左払いと右払いが共存し、威厳誇示が認められる。とくにAは下伸びを欠き、今回取りあげた全文書中、緊張度が最も高い。逆にFは三通の花押しき書状の中で最も寛いでいる

といえる。下伸びが勝り、威厳誇示がないことが、これを示す。実際にはこの書状は茶会の招待状であって、AやBが軍事・政略などを内容とするのと対照的に、風雅な書面である。

Gは散らし書きであるが、下伸びの出現率はFより高い。上伸びと下伸びの比は、Gが三対五、Fが四対五である。その上、線で抹消して書き直した場所が一つあり、リラックスの程度は最も高い。このGは料理献立であり、多分、メモとして家臣に渡したものであろう。

Hは上伸びも下伸びもない。したがって背がズングリと低い字になっている。左払いがなく右払いが一つある。すなわち威厳誇示はない。もはや誰にも対抗することもなく、気もはやることもない心境、ただわずかに右払い一カ所に気力を示すのみである。Hは年代不詳の和歌であるが、若書きではないように思われる。

Iについては、上伸びが一つ、下伸びが一つ、左払いがなく、右払いが一つである。Hと同様、ズングリの字である。月入、しの字を除いて伸び伸びした線はなく、狭く丸める形が多く、背をこごめているような字が多い。この画讃和歌は政宗六五歳の時のもので、筆跡には老いが見られる。ただし線の肌は滑かで艶があり、昔日の面影をとどめている。

四 政宗における書と人

文書ごとの特徴はわかったこととして、それならば政宗の書と人の全体はどうか。伊達政宗の全体的特徴は多様性ということでもまとめられる。複雑な構造、矛盾の統一といってよい。たとえば線の方向は多様を極め、互に並行する線はない(図2参照)。字画の太さ、細さも変動が著しい。その一例が図2でアンダーラインした部分である。

このような筆跡における多様性は歴史に見られる政宗の人間像とも一致する。

第一に、彼は武将であるが、単なる武将ではない、たとえば先見に富む政治家である。その一例は仙台城の作り方で、大広間を大きくして、要塞であるよりも平和の治城とした。また産業開発のため川村孫兵衛を起用し、大治水・土木事業をお

こし、成功をおさめる。また、制度の合理的整備を行政と解するならば、政宗は優れた行政官である。それは家臣の分封、農村組織の整頓・充実に見られる。そして武將だが、同時に多才の教養人で、和歌、能、茶湯等、風流好みは顕著である。

第二に、政宗は、一方では勇み足、衝動の強さを示しているが、他方では慎重、自己統制、柔軟性を表わしている。その一例は、勇み足による中新田敗戦、しかしその後の郡山対陣における決戦回避・兵力温存である。なお、筆跡面では、勇み足と衝動性は下伸びの線（勇み足↓速さ↓下伸びの発生的関係として）や文字と文字との接触（Bの第一行は一例）に見られる。慎重や自己統制は手本型の字に表われている。

第三は、派手、華麗、「だて」に対する内面的配慮と油断警戒の生活態度である。部下への思いやりの深さ、油断への戒めの実例が多い。筆跡のほうも、千変万化で華麗であるが、筆使いは慎重に法を守っている。

これを要するに、歴史的事実に見られる人間像は、筆跡から把握される人間像と符合するといってよい。筆跡心理学の立場からすれば、三三(1)に述べられたような、筆跡特徴とその心理的特徴の間の関係に関する仮説は、肯定できるものであることが検証されたと考えられるのである。

文 献

藩祖伊達政宗卿三百年祭協賛会編、伊達政宗卿、昭和一〇年。

小林清治、伊達政宗、吉川弘文館、昭和四四年。

黒田正典、書の心理―筆跡心理学の発達と課題、誠信書房、改訂版、昭和五五年。

黒田正典、多賀城碑の筆跡学的研究、宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要、一、一九七四。

仙台市立博物館、伊達政宗展、昭和五一年。

付記 この論文は、その骨子を東北教育新聞（昭和五一年八月一日号）に寄稿したものであるが、今回、理論的問題に留意して書き下ろ

したものである。また多大のお世話と教示をいただいた仙台市立博物館、とくに佐藤憲一学芸員に改めて感謝する。



A



B



C



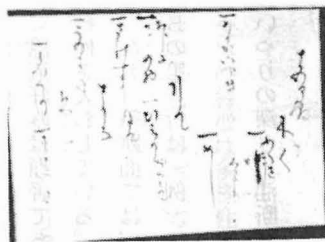
D



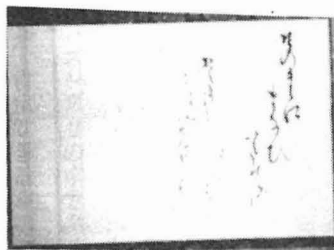
E



F



G



H



I



图 1



图 2



图 3



图 4



图 5



图 6